

岡倉覚三とインド

日本文化のアイデンティティー

五十嵐 潤美

明治の思想家、岡倉覚三(天心 1863-1913)は、近代日本の文化行政や美術振興の礎を築いた功績で知られる。彼の多岐にわたる活躍の中でここで注目するのは、彼の日本美術史の構想とアジア観である。彼の日本美術史は「アジアの中の日本」という意識が明確であり、そのアジア観はインドのナショナリズムとの共鳴が色濃い。彼の思想は、日本文化のアイデンティティー構築と異文化理解の問題点を示すと同時に、アジア諸国が美術の近代化の問題を共有できる可能性も示していた。そこで今日は岡倉のアジア観、日本観が、彼のインド文化理解と密接にかかわっており、特にインドのナショナリストであり考古学者、美術史学者であるラジェンドララーラ・ミットラ(1822-1891)の思想への共感に多くを負っているということを考察する。

岡倉はその著作 *The Ideals of the East* (1903)の中で、日本美術史を語りながら同時にそれをアジアの文明史の中に位置づけようとした。そのために彼が構想したのが、「西洋文明」に対抗するものとしての「東洋文明」である。これは古代インド・中国に起源をもち、仏教儒教などの精神的遺産を基軸に、アジア全体を一つの文明圏とみる考え方である。現在「東洋・アジア」という概念は様々な問題を含むものであるが、当時欧米の学者たちの理解からすると、古代ギリシャローマ文明を基盤とするヨーロッパ文明以外の現存する文明圏は想定されていない。「東洋/Orient/Asia」とは地域を指すだけの言葉で、そこには野蛮な辺境の文化もしくはすでに失われた、あるいは衰退した文明が点在するのみという認識であった。ところが岡倉は、現在東洋文明は失われたかのようで、アジア諸国は西洋列強に植民地化されているが、実はその高度な文明の粋は日本文化の中に脈々と息づいており、日本は東洋の新しいリーダーとしてその文明をさらに発展させる役割を担うと主張した。

岡倉のこのような考え方は、彼の日本美術史講義(東京美術学校、1890年)に既にみえるが、そのとき彼はまだ断言はできないとしている。彼を迷わせていたのは欧米のインド美術観である。当時インド美術研究は、ヨーロッパ特にイギリス学者たちがほぼ独占しており、岡倉ら日本の研究者は彼らの著作を通して情報を得るしかなかった。欧米の重要なインド美術観の一つは、ガンダーラの古代仏教美術に対するものである。ガンダーラ美術を「発見」したイギリス人は、そのスタイルに古代ギリシャ美術に通じるものを見た。そこから、「本来仏陀を表現するスタイルを持たなかった古代インド人は、ギリシャ美術の影響を受けて初めて仏像彫刻を制作し始めた、ゆえに古代インド美術の起源はギリシャにある」という考え方が生まれる。そしてそのギリシャ文明は「紀元前4世紀、マケドニアのアレキサンダー大王のインド遠征によってもたらされた」という説が広く受け入れられていた。このような論を唱えたイギリス人研究者アレクサンダー・カニングハムやジェームズ・ファーガソンらの著作は日本にも輸入され、岡倉自身もそれらの書籍を読んだ形跡がある。彼らの主張するように、もしインド美術の起源がギリシャにあり、インド美術はギリシャ美術の一支流ということになれば、そのインド美術を起源に持つアジア、日本の美術が、ギリシャの正当な後継者を自任するヨーロッパ美術と対等に並ぶことはできない。このようなことから岡倉は自らの東洋文明観を確立できないでいたのである。

ところが、1901-02年インドに旅し知識人らと交流した岡倉は、そこで仕上げた著作の中で、古代インド美術のオリジナリティをはっきり主張し、イギリス人研究者の主張するギリシャ文明東漸説を否定している。この変化から、岡倉がインド旅行中に自らの構想に何らかの学問的根拠を入手したことは確かである。従来の岡倉研究でもインドでの彼の変化の要因について様々な説が提唱されてきたが、私はそれをインド・ベンガルの考古学・美術史学者ラジェンドララーラ・ミットラの著作との出会いだと考えている。

ミットラは、イギリス人研究者たちのユーロセントリックなインド研究に対抗して、インド古代文明のオリジナリティを主張し、インド人が自国の文化に誇りを取り戻す契機ともなった学者である。ミットラは岡倉と同様に、自国の古典教育と西洋式の近代教育の両方を受け、語学に長け、西洋人の通訳兼アシスタントの役割から身をおこして、やがて自国文化研究のパイオニアとなった。特にインド建築の研究家ジェームズ・ファーガソンとの論争において、ファーガソンが「インド人はギリシャ人に教わるまで石材を使った耐用性のある建築物を建てるすべを知らなかった」という説を展開していたのに対し、ミットラはファーガソンを名指して批判し、インドの石造建築はインド独自のものだという説を打ち立てた。ファーガソンはその後の著作で、インド人が行った調査に科学的有効性などないと決めつけ、自説を繰り返すのみであった。それに対してミットラは、ファーガソンが自説の根拠とする点を一つ一つ検証して否定していった。最後にファーガソンは「ミットラ氏の著作について」というサブタイトルの本を出し、植民地政府のベンガル統治を気に入らないミットラらの一派がイギリス人を攻撃しており、自分は根拠のない言いがかりの被害者である、と主張するのみであった。冷静に史料を分析するミットラに対し、混乱したファーガソンは、インド人には考古学を科学的に研究する能力も思考する能力もな

いと人種攻撃しており、勝敗は明らかであった。この論争で、ミットラはイギリス支配に不満を持つインド知識階級の支持を受け、政治や教育などの分野でも活躍するようになる。

日本ではこの論争の一方のファーガソンの著作のみが読まれ、ミットラの側の主張は知られていなかった。インドに来て岡倉は初めて論争のもう一方の側の主張に接することになる。インドでの岡倉のホストでもあり、後にノーベル文学賞を受賞する詩人ラビンドラナート・タゴールもミットラを尊敬する一人で、裕福なタゴール家はその著作を所蔵していた。そこに滞在していた岡倉がミットラの著作に出会い、その業績へ共鳴したのであろうと思われる。岡倉の渡印時にはすでに他界していたミットラの仕事がタゴール家を通して岡倉に紹介され、岡倉のアジア文明観、日本の文化アイデンティティの確立に大きく貢献し、ミットラがしたのと同じように岡倉は西洋の価値観で非西洋文化をみる欧米の一元的態度に警鐘を鳴らしたのである。

では岡倉のどのような点にミットラの影響が見られるであろうか。まず岡倉はインド古代美術のオリジナリティーを証明するのにミットラが使った手法を用いている。岡倉は *The Ideals of the East* の中で、インドには古代から優秀な美術が存在したことを主張するが、彼がその根拠としたのがインド古典文学である。マハバーラタやラーマヤナなどの記述の中に絵画ギャラリーや立派な王宮の記述があり、これがアレクサンダー大王のインド遠征以前から高度な造形芸術を伴う文明があったとする根拠としたのである。これはマハバーラタやラーマヤナのみならず、リグベータやグラマー・オブ・パニーニなどの古典・古文書を詳しく検証し、その中の建築物や美術品を表す語彙を丹念に拾ったミットラの手法と同じである。次に、岡倉もミットラも外国人による表面的な異文化研究を批判している。岡倉は西洋人の日本美術研究は、日本美術に西洋の基準をあてはめたものに過ぎず、ギリシャ美術に似ているから価値が高いといった評価を痛烈に批判した。日本の美術は日本の価値観で、日本の歴史や文化的背景を考慮したうえで理解する必要があるというのである。ミットラもまたインド美術の主題をギリシャ神話にあてはめて解釈し、インド神話をその表層的な理解だけで野蛮と決めつけるイギリス人研究者を批判した。それに加えて、岡倉はイギリス人のインド研究の政治的思惑も指摘して批判している。イギリス人がインドとヨーロッパの言語的文化的関係の深さを強調するのは、イギリスによるインド支配が正当であるとインド人に思わせるためだとも述べている。このような憤りはミットラに対するファーガソンの人種差別的攻撃をふまえているのではないとも考えられる。このように岡倉の著作にはミットラとの共通点が多く、自国文化を西洋の価値観で評価・規定されることへの批判がみられるのである。

実際に岡倉は自らミットラの名前に一度だけ言及している。インドから帰国後、新聞のインタビューに答えて、インド研究がイギリス人にけん引されていた時代は終わり、インド人の間にすぐれた研究者が現れ始め、イギリス人の間違いを正しているのだ、と語っている。このとき岡倉はラジェンドララーラ・ミットラの名前をその代表として挙げた。そのうえ、岡倉に同行してインドに行った僧侶、堀至徳はタゴール家に滞在し英語、サンスクリット語、仏教を学んでいたが、彼が残した日記の中に、タゴール家でミットラの著作をテキストとして読んでいたことが書かれている。

このように岡倉は、当時日本ではアクセスできなかったインドの学者の仕事に触れ、自国民による自国文化研究、つまり非ヨーロッパ的視点での非ヨーロッパ文化の研究を貫いたミットラから多くを学んだと考えられる。ミットラが主張したインド古代文明のオリジナリティーとヨーロッパに対する批判的視点とを自らの思想に取り入れて、岡倉は初めて「東洋文明」という体系を構想することができ、その中でインド中国に起源をもつ日本美術の位置を模索した。多くの同時代の知識人がとらわれていた西洋対日本という構図から抜け出し、他のアジアの国の視点に目を向けたことが彼の日本美術のアイデンティティーの確立に深く関係していたのである。

最後に、今後の研究課題として以下の二点が挙げられる。まず一点目は岡倉のインドに対する態度と中国に対する態度にある微妙な差の細かな検証の必要性である。同時代の中国に対する冷やかな視線とは対照的に、インド芸術に対しては、その現在や将来の可能性を期待していた。これは、日本と中国の政治的緊張を反映しているだけでなく、個人レベルのコミュニケーションの問題もあるのではないだろうか。中国ではあまり個々の知識人や芸術家と交流できず、言葉の通じない旅行者としての関係しか築けなかったのに対し、インドでは約1年にわたり滞在し、英語を共通言語として、現地の知識人芸術家と直接交流し親交を深め意見を交わしたことがその態度の違いの原因の一つである可能性も考えられる。もう一つの課題は、岡倉を通して交流した日本とインドの芸術家たちの作品の検証である。岡倉のインドへの傾倒は、その後、芸術家レベルでの交流に発展し双方に豊かな実りをもたらした。岡倉の弟子、横山大観、菱田春草もインドに旅し、インドの芸術家と親しく交流し、インドを主題とする優れた作品を残している。一方でインドの芸術家たち A・タゴールや N・ボースも、西洋絵画をモデルとすることに抵抗し、そのかわりに大観らがもたらした日本画に新しいモデルを見出した。日本の帝国化、インドの独立運動などの政治状況を背景に、これらの作家たちが、岡倉の主張にどのように応え、国家やアジアをどのようにとらえて作品を制作したのか、個々の作品分析も今後の興味深い課題である。